

変わっていくものと変わらないもの

伊藤 宗親

子どもの頃、井戸端会議中の母親たちが、近くで遊んでいた私たちを理由も告げず急に家の中に押し込めるということがあった。納得のいかない私たちが、鍵穴から外を除くと、みすばらしい姿の男がリヤカーを引いて通り過ぎていった。昔でいう乞食である。子どもながらに何故母親たちは子どもに彼の姿を見せたがらなかったのだろうか、騒ぐとうるさいからだろうか、と納得がいかなかった。また、家族で上野公園に行った時、軍服のようなものを来た人が自作の立て看板の傍らに黙って座っていた。見ると片足が膝下からない。あの人はどうして……、と親に聞いてもちゃんと説明してはくれなかった。

こうした記憶は今でも鮮明で、この歳になればかつての親の態度もわからなくもない。が、やはり、きちんと説明すべきだったのではないかと思う。子どもなりに、汚いとか可哀想とか、それなりの感情が喚起される。そして、どうしてあの人は……と想像を膨らませる。その想像の答え合わせが親の回答なのである。子どもはそれを知って、自分の想像が行き過ぎだとか、正しかったなどと納得し、世間というものを学んでいく。大人が子どもの問いに答えないということは、その時に抱いた感情が否定されるのに等しい。自分はいけないことを感じたのだ、考えたのだと。

そのように考えている自分としては、質問されたらできるだけ答えようと思っている。しかし、質問されることは少ない。特に、学生からの質問が少ないことに、多少のいらだちとどうして?という思いが募る。修行が足りない所以であるが、「(みんな)なぜ質問しないのか? そんなによくわかっているのか?」という自分自身への自分の問いに答えられないままであるのも事実である。私自身は結構「なぜ?」を考えるのが好きなたちなのでそう思うだけなのだろうか。小学4年生の時には、担任の意見に納得がいらず授業をボイコットしたこともあるし、大学で専門外の講義(中世日本史など)を受けて疑問が生じれば、休み時間にその先生の部屋に質問しに行っ

たりもした。そういうことが学びだと思ってきた節がある。

では質問されたら答えられるのか。当然答えられないものもある。カウンセリングで、小6の男の子が「人は何で生きないといけないのか」とか、クライアントの大学生が「先生は何でカウンセラーになったのか」など、若かった頃の私はうまく答えられなかった記憶がある。無論、カウンセリングの技法として聞き返すという手もあるにはあるのだが、真剣な質問にはそれができなかった。結局、中途半端な返答しかできなかったのである。こう考えると、子どもの時の自分のように、質問しても答えてくれはしない、と思っているから質問をしないのか?という考えに思い至った。もし、それが正しければそれはゆゆしき事態で、大人がはぐらかしてきたから悪いのである。どうしたら、質問が増えるのか、が私の課題である。

質問することをよしとすること、つまり、質問してよかったと思える体験は重要なのだと思う。そのためには、常に回答する心構えが大切だろうとも思う。別に、正しいことを言う必要はなく、自分はこう思うということを直截に伝えられればよい、と思っている。最近、正しい-正しくない、という似非倫理観に大人が支配されているように感じる。正しい、なんてそう簡単にわかるものでもないし、その価値観は変化し得る。質問した人の記憶に残るのは、唯一、あのとき、あの人はああ答えていたな、ぐらいである。しかし、その人との関係の中でその人らしさの例として、その回答が質問者の中に残っていることこそ、大切なのだと思う。

たいていの場合、質問する側は自分の回答があって質問している。つまり、回答できる人が質問できる人なのである。そのことを忘れないでいたい。

(当協会研修講師)

